

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

ソビエト、ロシアにおける民族と言語問題（5）

民族理論の初期の実践（3）

Nationality and Language in Soviet and Russia（5）:

Nationality and Language Policy of the Early Soviet Socialism（3）

福田 誠治

FUKUTA Seiji

1．非識字者一掃運動

革命の直後、ルナチャルスキーはレーニンに呼び出された。教育人民委員⁽¹⁾の職につくようにとの要請であった。そのときレーニンは言った。「つまり君はロシアの非識字者（ ）をぶち倒さなければならぬのだよ」と。これが、彼の一言目であった。この時、良き協力者としてレーニンから紹介されたのが、レーニンの妻のクループスカヤと歴史学者のボクロフスキーであった。⁽²⁾

1917年10月26日の第2回ソビエト大会において、人民委員の名簿が発表されたとき、レーニン、トロツキー、ルナチャルスキーの3人には特に拍手が大きかったと言われたほど、彼に対する人気は高かった。

ルナチャルスキーは、思想的にはポリシェヴィキ左派に近く、ゴーリキーらの提唱する「建神主義」⁽³⁾に同調した。真の社会民主主義者は「最も深く宗教的な人間」であるというように、民衆は革命を通じて価値を追求し、「美的で力強い人間、完全な人間」へとすすみ、やがて未来には完全な社会主義的人間となる、それこそが神であるとルナチャルスキーは考えた。彼は、価値追求の情熱とか人生への熱狂を重視していたので、科学によって宗教は消滅するとは考えなかったのである。

レーニンは、科学的認識に基づいて合理的に人間生活が組織されるはずだと考えた。したがって、宗教は無用であり、むしろ有害であると考えていた。1909年のこと、レーニンは『唯物論と経験批判論』を公刊し建神主義を否定した。1913年には、レーニンがゴーリキーに手紙を書いて最後の批判を行っている。ルナチャルスキーもゴーリキーも、その後は沈黙したが、彼らの思想の根底には新しい神が見えていたかのようである。

既成の宗教を否定しながら、どのように精神的価値を追及するか。ルナチャルスキーは、1918年に教育の本質を述べたくだりで、ロシア語の「教育」()とは「人々が、各自をどんな人間にすべきであるか、社会をどんな社会にすべきであるか、決めなくてはならなかったときに、ある素材から人間の形が出現してくる光景を描いてみたのである」と、教育目標は自らの世界観を表すとして、社会観や世界観に積極的に関わることを民衆に提起した。そして、人間が自分の理想を描いたとき、英雄とか勇士、つまり「神という理想」を考えだし、「永遠にまで発展してゆく全能な力」をそなえたものになったのだとルナチャルスキーはみなしたのである。「人間は自分のなかに自分自身の理想を

持っているのである」という、彼のことは、民衆に自分自身の理想を高めよと呼びかけているように見える。⁽⁴⁾

あるいはまたルナチャルスキーは、ある時は神ということばを避け、「新しい人間」()ということばで、未来の人間像を展望し発言していくことになる。⁽⁵⁾

ルナチャルスキーは、諸個人が自ら文化を創造する活動を重視した。ルナチャルスキーは、革命前夜に始まる「プロレタリア文化」() : プロレトクリト) 運動の発起人ともなり、革命後もこの運動の自治を教育人民委員部は尊重するようにした。文化・芸術活動は自律すべきで、政府機関の管理にはなじまないと考えたのである。プロレトクリトの指導者ボグダーノフは、ブルジョワ文化を棄てプロレタリア文化を創造しようと活動していた。

レーニンは、全く逆に考えた。1918年9月17日に第1回全ロシア・プロレタリア文化・啓蒙団体代表者会議がモスクワで開催される。名誉議長レーニンは、労働者がソビエト政権に参加できるように援助することがプロレタリア文化・啓蒙運動の任務であると指摘した。⁽⁶⁾ 暗に、ブルジョワ文化をまず学べと言ったのである。1919年5月6日19日の第1回ロシア校外教育大会の場で、プロレトクリトの活動が正式の議題となった。レーニンは、初日の祝辞において、「真のプロレタリア革命の第一の任務」が「数千万、数億の人々を組織するという任務」、すなわち「無知と非文化性、野蛮と粗野という遺産を克服する事業」、「読み書きできる者を動員して非識字者を一掃するという簡単な、緊急な問題」にあると指摘した。⁽⁷⁾ さらに、レーニンは、これに飽きたらず、大会最終日に飛び入りで長時間の演説を行い、プロレトクリトのいう「プロレタリア文化」はインテリゲンツィアの作り話で、穀物や石炭を注意深く配分するというような「プロレタリアの規律」を教えることがプロレタリア独裁期の文化活動の任務であると言い切った。⁽⁸⁾ レーニンは、文化活動を極めて狭く解釈していたことになる。

1920年に入って、政治・イデオロギー教育の強化をはかる目的で、政治教育総局() の創設が議論される。いわば、ルナチャルスキーの率いる教育人民委員部に対する不信の現れである。同年10月5日の第1回プロレトクリト大会を前にして、大会において「プロレトクリトは教育人民委員部の統制に服し、その機関となる」と発言せよとレーニンはルナチャルスキーに迫った。ルナチャルスキーはそれを無視した。レーニンは直ちに介入し、文化・教育事業はプロレタリア独裁の目的を達成し、階級闘争と一貫することを規定した決議案を大会に提出した。プロレトクリトはそれまで認められていた「自治」を剥奪され、政治教育総局に従属する教育人民委員部の補助機関とされることになった。文化も教育も政治に従属するという命題は、この時に明確になった。プロレトクリトの自律を支持した政治局員はブハーリンただ一人だったという。そして、レーニンは、文化問題にも自治否定を徹底したのである。

識字は、初期のソビエト教育の最大の目標であったが、ルナチャルスキーやクループスカヤは全ての住民に手厚い普通教育を与えることに着手した。教育の基本政策は、「統一にして労働的な」学校教育を旨すと、『統一労働学校規則』⁽⁹⁾ で方向づけられた。ルナチャルスキーは、この政令を1918年10月16日に公布する時、『統一労働学校の基本規則』を公表して、教育政策の基本的な思想を宣言した。

「統一労働学校」では無償・義務・世俗という公教育の三大原則と、男女共学が適用さ

れた。世界に先がけて中等教育への全入が目ざされ、女子の差別が撤廃されたことは、教育可能性の確信を根本とする革命思想の実現として注目される。「学校生活の基本は生産的労働でなければならない」とあるように統一労働学校のもう一つの原則は「労働」である。これは、書物中心の詰め込み学校を否定し、生産活動のなかで生き生きと学ぶ学校の建設を意味していた。学校における労働が「創造的な喜び」にみちたものであり「内面的規律」を育成すると考えられたのである。だから、宿題も懲罰も禁止され、試験も一切廃止された。学習は興味を原則で成立させられるべきであり、教師は「最年長の子ども、最年長の同胞」であると説明された。

さらに、学校は生徒のみならず住民の自治能力を育てる場とみなされ、「学校会議（ソビエト）」を設置して、学校運営をこの自治機関に委ねようとした。学校会議の構成は教師をはじめとする教育労働者全員、労働者住民代表、12歳以上の生徒代表、それに地方自治体の教育行政機関である国民教育部の代表の四者とされた。また、学校ソビエトには、生徒の組分けや卒業認定、各学年の授業計画および指導要領の承認、年間予算案・決算報告の作成等ほとんどの問題を処理する権限が与えられていた。

ロシア共和国教育人民委員部の構想では、いわば、規則で子どもたちを管理するのではなく、自由な雰囲気为学校が指摘されていた。そして、根底には、自治の思想さえ見受けられるのである。

すぐさま、職業教育論争が起きる。各産業部門では、普通中等教育よりも早急な職業教育を望んだからである。彼らは、労働現場で腕を振るう職人を展望した。ルナチャルスキーやクループスカヤは、職業教育を普通教育のなかに含み込ませた「総合技術教育」という発想で対抗する。彼らは、知識と技術を持った労働者が働く近代工場と、市民が分業しながらも広範な側面で共同生活する社会とを展望した。この思想は、ポリシェヴィキの党綱領のなかにも明記されている。しかし、職業教育をめぐる見解の相違は、教育人民委員部と他部門との対立を描き出しただけでなく、民族自立を目標とするウクライナ共和国の教育人民委員部とさえ対立を引き起こした。レーニンは、1920年末、一方で総合技術者教育を擁護して、「グリニコは見たところ、総合技術教育を否定しつつ、ばかばかしいほどに吠えだしている」と非難しながら、他方でクループスカヤには、「緊急な、現在の、悲しむべき現実」を考慮し、中等教育（12～17歳）を「手工業者」すなわち「^{さしもの}指物工、大工、鉄工などを提供する」総合技術的な職業学校へ改組することを提案した。⁽¹⁰⁾ここに登場するグリニコは、ウクライナ共和国教育人民委員である。結果的に、ウクライナの主張するように、ロシアでも、普通教育は初等段階に切り下げられることになった。

1928年には自由な雰囲気「新経済政策」(NEP)が終わり、ブハーリンも批判されるに至る。そして、NEPの終わりに合わせたかのように、1929年にルナチャルスキーは教育人民委員を更送される。⁽¹¹⁾革命からほぼ10年間のソビエトの教育・文化問題を担当したルナチャルスキーは、いかなるメッセージを送り続けたのであろうか。

(1) 文化戦線

ロシア革命が起きてまもなく、革命政府の教育方針が教育人民委員ルナチャルスキーによって発表された。『国民教育に関する呼びかけ』と題する声明は、1917年10月29日(旧暦)の署名があり、11月1日に発表された。その中では「非識字と無知が支配する国の教

育分野を扱う、本質的に民主主義的な政権は全て、この暗黒との闘い（

）を第一の目的にしなければならない。学校網を組織して、最短期間で全員が共通して読み書きできる（

）ようにしなければならない」と、教育の主要な問題が識字という最も基礎的な能力にあることが指摘されていた。この「非識字や無知との闘争は、子ども、少年、青年のための学校教育に限定することはできない。…成人学校は、国民教育の全体計画の中で広範な地位を占めるべきである」と、基本的な教育の対象者が全住民であることを明らかにしている。⁽¹²⁾

革命の根本的な思想が、「隷属状態からの解放」⁽¹³⁾にあるとするならば、ルナチャルスキーは、この解放は知によってもたらされることを指摘したことになる。そして、それは、革命政府の意気込みをも示していた。

この時点で、教育目標に「社会主義的人間の育成」とか「共産主義思想の理解」が入っていないことは、革命政府は改革派諸勢力との対立を避けながらより根本的な能力の育成を重視したといえるだろう。

1917年12月24日決定の教育人民委員部の最初の組織には、「全住民識字化部」と「校外教育・人民大学部」が設置されていた。1918年1月には、これら両組織が統合されて、「校外教育部」となる。部長には、クルーブスカヤが就任した。校外教育部が担当した分野は、成人・青年の学校制度を組織すること、この学校における授業を実施するためにカリキュラム・教授法・教科書を作成すること、これらの活動で地方の国民教育部を援助すること、校外教育のモデルを確立することであった。非識字者一掃を目的に、図書館、成人学校、農村図書室・文化室、クラブ、人民会館などを運営し、これら全ての事業を拡大しながら「そこに共産主義的内容を盛り込む」ことが教育人民委員部の任務とされた。⁽¹⁴⁾クルーブスカヤの理解でも、校外教育の仕事の本質は「政治的な扇動と宣伝を文化活動と結びつけた政治啓蒙」⁽¹⁵⁾となっていた。文字を通して教えられるのは、革命思想であり、ゆえに教育活動はまさに革命の戦線なのであった。

非識字者一掃は、革命政権の重要な政治運動になり、1917年暮れには、すでに「非識字者一掃活動家」（

）という言葉が使われていたようである。1917年12月21日に、教育人民委員部は、学校の施設を文化啓蒙活動のために利用することを許可している。これらの学校の施設を土・日に使用したり、また独自の施設を確保するなどして、1918年春には、ペトログラードやモスクワなどに「非識字者一掃拠点」（

）が開設されている。1919年3月のロシア共産党第8回大会において、新綱領が採択されたが、その中に労働者や農民の自己教育を全面的に援助することを目標として、図書館、成人学校、人民会館、映画館など学校外教育施設網を設立すること、そこを共産主義思想の宣伝に利用することが明示されている。第8回大会には、特別決議『農村における政治宣伝と文化啓蒙活動について』が採択され、農村においては共産主義宣伝、識字を含む一般教育、農業教育は一体となって進めることが指摘されている。

読み書きの能力に関して、よりはっきりした政令が1919年12月26日に『ロシア共和国住民非識字者一掃に関する布告』として公布される。⁽¹⁶⁾そこには、「共和国内の、読みもしくは書きできない、8歳から50歳未満の全住民は、希望により母語かロシア語（

と書かれていた。

個人の「希望により」「母国」で識字を学べるということになると、文字のない民族語には文字表記を考案し、多くの民族語でテキストを編集し、それぞれの言語の教師をあてなくてはならなくなったということである。1920年代と1930年代には、言語計画に基づき、辞書、綴り字参考書などが作られ、専門家たちが48民族に書記言語（written language）をあてがった。ソビエト連邦を構成することになるキルギス、トルクメン、タジクなど、ロシア連邦を構成することになるバシキール、モルドワ、ブリヤート、カルムイク、イングーシ、チェチェン、カラバルバクなどの諸民族は、この時初めて民族の言語が文字表記されることになった。

（2）非識字者一掃運動の展開 識字拠点、文化基地、学校

当時のソビエトは、就学年齢などというものを持ち出すことが無意味であるほどに、年齢に関わらず圧倒的多数は識字能力がなかったのである。しかも、教育施設の条件は劣悪で、そのうえ学校の授業を行うにも教師たちは革命政権に抵抗した。1918年あたりでは、教師たちは都市ではストライキを行い、農村では反革命の白軍に味方する者が多かった。教育人民委員部は、教師や学者たちに譲歩し、社会主義を強制せずに教育・文化活動で連合を組む方向をとるしかなかった。教育・文化問題は、階級闘争の一翼である「第三戦線」（third front）と理解されたものの、方法は「柔軟路線」（soft line）をとることになったのである。このことは、ボリシェヴィキの中央も黙認することとなり、プハーリンはその理論的な後盾になった。⁽¹⁷⁾

学校のなかでも、学校の外でも、教育活動が展開された。「1920年代と1930年代を通じて、ソビエト連邦は驚くべき短期間に非識字を克服し、民族語を使用できる普通教育学校を発展させた」と評価されるように、⁽¹⁸⁾ ソビエトで実施された識字運動は、困難な条件下でも短期間に広範な大衆の識字運動を展開した先例として特筆されるべきであろう。⁽¹⁹⁾

1920年6月19日、「非識字者一掃全ロシア臨時委員会」が結成された。当委員会の下部組織が全ての地域に構成され、地域住民のうち非識字者と半識字者の登録を行い、識字教育を推進することになった。

非識字者に識字を教えるのは、教師だけでは足りず、役人や、中等段階後期に当たる高学年生徒、あるいは労働者や農民の中に学のある者がいれば彼らが、また退役軍人など可能な限りの者がそれにあたった。教師や講師を急いで養成するために、短期講習が各地で開かれた。

実際にその活動で大きな働きをしたのは、コムソモールと呼ばれる共産党の青年組織と労働組合であった。青年たちは、自分たちが学校で学びながら、識字教育の教師となり学んだことを社会に返していった。全連邦労働組合評議会および地方組織は、工場の施設を使いながら識字学校や講習会の場所を提供し、学校に光熱を供給した。そもそも工場労働者自身が識字教育の対象となっていたわけで、企業の事務機構が労働者とその家族のなかから非識字者や半識字者を登録し、彼らを学校に行くよう促し、その出席状況を記録した。もちろん、企業は、通学の機会を与えるべく、仕事の上でも便宜を図った。また物質的にも、教科書、教材、それに教師の給与も、労働組合の力にたよった。

1923年には、識字協会が結成され、ロシア共和国の成人（18歳以上）を対象に活動を開

始した。未成年であっても、実際に労働している者ならば、この対象に含められた。この組織は拡充され、1924年には、全ロシア中央執行委員会議長のミハイル・イワーノビッチ・カリーニンを議長に据えている。識字協会は、何十万人というボランティアを募り、識字教育の教師に採用した。彼らは「文化戦士」と呼ばれるほどであった。

革命後10年ほど、農村地帯では、学校といっても名ばかりであった。粗末な小屋で、ろくな教材もなく、学歴のほとんどない活動家が、かろうじて読み書きを教えていたのが実体である。⁽²⁰⁾

就学年齢の子どもたちを対象にした学校の他に、さまざまな教育施設が考案された。クルーブスカヤは、「農村読書室」を農村内の文化諸施設の活動を調整する核として機能させようとしていた。⁽²¹⁾

1925年の時点で、クルーブスカヤは、農村の識字状態について率直に述べている。レーニンは、「文字の読めないために新聞音読会を催すと良い」という提案をしていたが、これは1918年や1919年のことである。それが、内線が終わり、「今ようやくその重要性が目前のものとなった」ので、農村読書室で新聞音読会を行おうというのである。⁽²²⁾

識字教育の大きな波は、1920年代末から1930年代前半の工業化の時代に、ちょうど第一次五ヵ年計画と歩調を合わせるように、広くは「文化革命」、狭くは非識字者一掃「文化運動」("cultural campaign" against illiteracy) という名で現れてきた。コムソモールは、1928年に「文化運動」を開始し、大衆の文化水準の向上を目指した。この文化水準とは、非識字と無知蒙昧からの脱却である。後者は、主として、反宗教活動を意味した。識字運動と合わせて、これらの活動は「文化十字軍」とさえ呼ばれたほどだ。この「文化運動」は、3年以上続いた。

識字協会は、『文化運動』、『文化革命に向けて』、『学校援助』、『読み書きの学習』、『文化建設』といった複数の新聞を発行し、社会的な活動を盛り上げた。

教育人民委員部および下部組織である国民教育部は教材を開発し、指導要領や教授法を印刷して普及した。識字教科書は、ソビエト全体で、25言語で書かれたという。⁽²³⁾

1930年には、とりわけ識字教育が強化された。受講生の数は、前年比でも、ベラルーシで4倍、タジクで5倍、ウズベクで6倍という具合であった。

成人学校は、工場、国立農場、文化施設に付設して設置された。遊牧民に対しては、集結地点に、冬期学校あるいは夏期学校が開設された。中央アジアの国々では、イスラム文化圏ということも考慮されて、女性教育センターが設置され、個人や少数グループ向けの講習会も編成されたり、移動教室も開催された。

この時期の文化運動の成果は、1930年代前半になってはっきりと現れてきた。

このような、識字教育の動きに加えて、就学年齢層に対する実質的な義務教育が普及した。義務教育は、1930年7月25日の共産党中央委員会の決定によって開始された。それに続いて、1934年の共産党第17大会では、1930年代半ばまでに僻地の農村地帯の民族地域に4年制の義務初等教育を実現し、1937年までに前期中等教育(5~7年)を全土に確立するという決議を下した。教育運動が、全土にわたって大きく展開したわけである。⁽²⁴⁾

こうして、1937年までには、多くの共和国において、非識字者向けあるいは半識字者向けの識字学校はほぼ役割を終えた。ソビエト全土に関しては、全ての民衆の非識字一掃は、1959年にやっと終わった。

識字教育受講した成人の年代別推移（万人）

	非識字者	半識字者	合計
1927年	131.15	18.91	154.06
1928	124.70	21.87	146.57
1929	179.96	25.62	205.58
1930	577.15	92.25	669.40
1931	618.98	306.50	925.48
1932	766.36	658.21	1,424.57
1933	477.00	419.95	896.95
1934	465.98	375.80	841.78
1935	386.77	384.40	771.17
1936	332.96	377.59	710.55
1937	408.60	438.00	846.60

Fundamental and adult education , UNESCO , Vol.11(3) , 1959 , p.186.

共和国および男女別の識字率（対象者は9歳以上の住民）

	1926年12月17日			1939年1月17日		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計
ロシア共和国	72.0	40.5	55.0	92.3	73.0	81.9
ウクライナ	75.5	40.9	57.5	94.8	76.8	85.3
ベラルーシ	71.5	35.8	53.1	90.7	68.1	78.9
アゼルバイジャン	33.2	16.4	25.2	81.5	64.5	73.3
グルジア	55.5	39.4	47.5	86.1	74.6	80.3
アルメニア	49.5	19.2	34.5	85.0	62.4	73.8
トルクメン	16.5	7.7	12.5	73.3	60.6	67.2
ウズベク	14.2	6.5	10.6	73.6	61.5	67.8
タジク	6.2	0.8	3.7	77.7	65.2	71.7
カザフ	32.6	12.5	22.8	85.2	66.3	76.3
キルギス	22.1	7.4	15.1	76.7	63.0	70.0
ソ連邦合計	66.5	37.1	51.1	90.8	72.6	81.2

Fundamental and adult education , UNESCO , Vol.11(3) , 1959 , p.188.

（3）ロシア語の文字改革

初代教育人民委員ルナチャルスキーは、ロシア語のラテン文字化の支持を表明していた。革命直後のポリシェビキにおける民族関係の担当は、民族人民委員部と教育人民委員部であった。1920年以降は、文化、教育問題は、教育人民委員部が担当する体制が出来あがった。1929年のこと、教育人民委員部内の少数民族教育部の要請で、文字を保持していない民族に対してどの文字が適当かを検討することになった。これを担当したのは、教育人民委員部内の学術総局（ ）である。報告書によれば、文字を統一すること、採用すべき文字は全文明世界の文字、つまり「ラテン文字」である、と結論が下されてい

る。

財務人民委員のソコリニコフは、教育人民委員のルナチャルスキーに対して、ラテン文字への転換を熱心に説いたという。ロシア語をラテン文字に転換すれば、欧米の文献が直接ロシア国内で普及し、自然科学・技術に関する知識がロシアに移転され、ロシアの経済発展に有利である。また、ラテン文字を使えば、欧米人がロシア語を習得するのも容易になる、というのである。⁽²⁵⁾

さて、教育人民委員部は、ラテン文字化という方針を固めて、文字改革に着手した。そのもっともよき協力者が、アゼルバイジャン共和国であったということであるらしい。ただし、ロシア語のラテン文字化は、表面には出てこなかった。これが、ソビエト教育史の誤解が生まれる原因であろう。

ロシア語のラテン文字化が表面に出てくるのは、『東方の文化と文字』第6号（1930年）である。ここに、1929年1月のルナチャルスキーの発言が再録された。⁽²⁶⁾

ルナチャルスキーは、ラテン文字化に失敗した国の例として日本とドイツを挙げている。彼は、アラビア文字からラテン文字に転換した諸国の成功に、ロシア人たちは衝撃を受けていると語る。教育人民委員部学術総局が、大掛かりな委員会を開催してまとめたところによると、ラテン文字に基づく新アルファベットは、東洋と西洋との文字の統一をもたらし、二重文字体系をなくし、ロシア語からアクセント記号をなくし、読み分け記号もなくし、不自然な手の動きを要しない読み分け記号にとどめ、使用文字数を少なくし、母音に移行する前の軟音が表現できる、という。ルナチャルスキーの賛成理由は、東洋と西洋との交流が大規模になること、使用する文字の数を20%減らすことが出来ることを挙げ、ラテン文字化のもたらす利益は巨大だと説明する。これには、西欧文化の方が進歩的であるという判断が、念頭にあるということを確認しておこう。

彼は、「ラテン文字への転換は、何も問題ない」と言いきる。彼は、文字転換とは言語体系をそのままにして単なる表記を変えることに過ぎないと考えていたようである。この判断は、正しかったのだろうか。

ヤコブレフ教授は、ラテン文字化の歴史を追いながら、アラビア文字ならず、いかにロシア文字が宗教と結びついた封建的なものであったかを分析した。⁽²⁷⁾したがって、新アルファベットは、アラビア文字と一部の「ロシア文字」に対する戦いである。アルファベットの戦いは、プロレタリアートの反宗教闘争、東方にソビエト文化を普及する手段、アラビアの身分制度に対抗してソビエトの文化と学校を獲得する戦い、つまりムスリムの精神世界、精神主義的な学校と宗教的・ブルジョワ的な内容の文化に対抗する戦いなのだ。こうして、新アルファベットは、プロレタリアの社会主義建設の文字であり、東方における文化革命の文字である。また、ラテン文字は、イギリスやフランスでも使用しており、世界的に有用である。ソビエトにおける社会主義建設の時代に、ロシア文字は時代錯誤である。また、大衆は、「ロシア文字」の果たしたロシア文化と大ロシア主義的排外主義という役割を忘れていない。ロシア人もまた、国の工業化と再建のために、新しい文化を新しい生活形態の上で作るために、ラテン文字化をはかるべきである。しかも、ラテン文字をより近代化したのが、新アルファベットである。ラテン文字を使用すれば、スペースが平均で11～12%縮小され、印刷ひいては輸送にかかる費用が削減され、85～90%経済的となり、生産は拡大し、五ヵ年計画はめでたく達成される。ラテン文字は、書くのに15%節

約され、読むのに4倍のスピードとなる。統一新アルファベットによって、プロレタリア文化も統一され、ソビエト同盟の全民族の統一もはかられ、しかも国際文字となる。

1930年当時、「ラテン文字は共産主義的国際主義の文字であり、ロシア文字は封建的、家父長制の文字である」とも宣伝された。⁽²⁸⁾ また、当時ハンスパーロフ著『ラテン文字、それはレーニンの民族政策の武器』(1932年)という書物も出版されている。

1936年8月の全ロシア自治共和国教育人民委員会協議会において、新文字委員会は、「ロシア文字には封建的・家父長的なすがこびりついている」と報告している。ロシア文字のラテン化を示唆した。この時点で、言語政策に対して、二つの流れがあったことを意味する。

ロシア語の改革には、ラテン文字化だけでなく、エスペラント語の普及も関連がある。国際共産主義運動を展開するにあたって、スターリンは、エスペラント語に注目したようである。

(4) 土着化と言語問題

土着化政策に基づき、民族には、領土と言語、文化が保持される方針が貫かれた。連邦構成共和国および自治共和国など民族政権に対して、一つの民族言語の確立が目標となった。その結果、ロシア革命の時期に60以上の民族が文字を持ったとも言われる。

イスラムの諸民族に対しては、アラビア文字を廃してラテン文字に転換する道がとられた。この動きは、1920年代後半から1930年代半ばまで続く。

ところが、非イスラムのより小さな民族は、ロシア文字に基づいて新アルファベットが作成されていた。ハッカス、オイロート、ショール、チュバシ、アルタイ、東部フィン、ベルミ系のモルドワ、マリ、コミ、ベルミヤーク、ウドムルト、それに領土を持たないジブシー、アイソールなどである。1920年代までのそれらの動きは突然転換され、1930年あたりからは、イスラムの諸民族と同様に、ラテン文字に再転換されて諸民族の使用文字の統一が目指された。

そして、それらすべての動きをもう一度転換して、1930年代後半にロシア文字一色に塗りつぶされることになる。

この当時、1920年代にスターリンが採用した政策は、地方党、政府組織の民族化であった。1928年から1931年にいたる文化革命期においても土着化はむしろいっそう強力に推進された。民族語の教育が開始もしくは推進され、地方のロシア人は民族語を学ぶように奨励された。この動きは、1930年前後の文化革命とあいまって、土着化という形で、民族平等という立場が、追求されたといえる。

1930年代の初めまでは、いわば民族自決の原則を領土と言語に教条主義的に適用した時代であった。主だった民族には領土が与えられた。主要民族は自決権を持った共和国を構成し、中程度の民族は自治権を持った自治共和国を、また少数民族には自治区が与えられた。土地が民族別に地図上で分割されたのである。ここに、アメリカ合衆国とは全く異なった多民族国家構成原理が現れている。また、言語には文字が与えられ、それほど実用性のなかったベラルーシ語や方言にすぎなかったチュルク諸語を共和国の言語として独立させる努力がなされた。

だが、歴史を少し詳しく見ていくと、1930年代の前半にも土着化を容認されたイスラム

諸民族や極北・極東の少数民族の他に、1930年代初頭に土着化が停止されロシア化が進行するウクライナやベラルーシのスラヴ諸民族、民族確立を無視あるいは断念されたユダヤ人や極小の諸民族という3グループの存在が浮かび上がってくる。

(5) クループスカヤの民族語論

クループスカヤは、1931年に『民族教科書』という長文を書いている。⁽²⁹⁾

「子どもたちは現地の言語を知らなくてはならない」のに、ロシア語学校では、ロシア人の子どもたちが現地語を学ぶということが、わが国では今日まで行われていないと、クループスカヤは批判する。「わが国では土着化が行われていて、子どもたちはその地域で活動しなくてはならない」とも指摘する。つまり、非ロシア民族共和国においてはロシア人もまたその民族語を学ぶこと、これが土着化だと考えたわけで、スターリンなどのロシア語・ロシア文化優位論とは異なった思想が表明されている。

しかも、クループスカヤは、母語に関する問題を「教育学の問題」ととらえ、「理解し、一連の新しい知識を手に入れ、知識を獲得すること」は、「身近でわかる言語」つまり母語で「のみ可能」であるという判断を示した。

なぜならば、教育に母語を用いないと、「いつも、理解できない言語で新しい知識を獲得するという二重の困難に直面することになる」と、クループスカヤは指摘する。だから「子どもが周囲から聞いていることば」、「子どもの回りの住民が使用する言語」で教育を行うことをもめている。あるいは、「子どもにとって実践的な言語は母語である」とも言っている。

ただし、クループスカヤは、母語で教育すること、その地域の言語で生活することの重要性を指摘しながら、他方でロシア語が変質しつつあることを認めており、ロシア語優位論に道を開いている。クループスカヤは、言語は生活と共に豊かになるもので、「トラクター」というような「国際的な用語」を様々な言語が取り入れているように、「民族言語の接近」に向かって進んでいく。一つの言語でも、インテリの上層部や学界の言語と、大衆の言語とのあいだには大きな溝があったが、ロシア語ははるかに多く大衆的となり、「すでにこのような溝は死滅しつつある」。さらに、地域的な方言群や方言が死滅し、誰も理解できないような地域的言い回しがより少なくなって、ロシア語、つまり「われわれの言語は民族共通の言語となっている」というのである。それに加えて、革命により「支配階級が死滅し、政治路線が大衆に支えられ、言語が広範な大衆の言語となっている」ので、ロシア語はますます共通の言語となってきているのだと、クループスカヤは説明する。

ロシア語が革命の言語として優位であることをクループスカヤは認めながら、「大衆」とりわけ「少数民族（ ）の広範な大衆」あるいは「民族大衆」は、「革命的経験」を必要としている、と指摘する。ロシア語の位置は、かつては「押し付けられたもの」だが、今日は、「自ら進んで学んでいる」ものである、とその性格が変化したことも指摘した。そこで、「ロシア人は現地語を学ばなくてはならない」が、「諸民族の広範な大衆」が「革命文献や社会建設に関する文献などをロシア語で学べる」ようにしなくてはならないという結論を下す。むしろ、「より速い速度で、ソ連邦の全土の革命的経験を知るものなど、民族語で文献や教科書を作り出さなくてはならない」と教育の課題を自覚するのである。⁽³⁰⁾

ただ、クループスカヤは、非ロシア民族のロシア語学習とロシア人の現地語学習とを同時に主張していたのであって、ロシア語学習を奨励していたという解釈は不十分であろう。

(6) 文化革命論とその一面化—文化革命をどうとらえるか。

ソビエト同盟の授業言語の数は、着実に増加し、1934年にピークを迎えて、104言語に達した。その後、この数は減少し、1984年には46、1988年には39となっている。⁽³¹⁾

そうしてみると、1920年代から1930年代前半にかけてのソビエトの時代が、いかに特異な時代であったかがわかる。一つには、ロシア帝国のようにロシア語一言語のみが容認された時代とは明らかに異なった原理が進行した。もう一つは、民族語の普及がその後さらに減少するという意味で、再度の原理転換が図られたからである。歴史を下れば、もう一度授業言語が増加するのは、ソ連邦末期の民族運動が高揚した時期で、1990年に14言語増加した。

民族政策に関わるものとして、1932年にはパスポート制が導入されている。住民は、連邦内移動も強く制限された。これは、民族を分離して固定する政策として進行していく。民族を領土に分離させる「民族自決論」の裏返しとして、住民は土地に縛り付けられ、民族は領土に分配された。さらに、農民の国内移動は、1974年の国内パスポート交付まで、厳しく制限された。

スターリンが報告したように、学校教育制度の確立と普通義務教育の普及（非識字率の低下、就学率の向上）専門教育を受けた専門家（要員）の創出（学歴の向上）映画・演劇・出版など文化施設の建設や発行部数の増加に指標をとると、文化革命は1930年代の後半に完了したという見解が一般的なものとなる。

だが、そのような量的増大ではなく、文化革命とは「人間の変革」を主要な任務とし、階級社会の中で疎外されていた人間性を真に解放するものととらえれば、文化革命は文化の質こそを問題にするものであって、未完のままいくつかの段階を経ながら今日に至っているという議論も成り立つ。⁽³²⁾ この場合には、スターリンが指摘した指標は、「この主目的を達成するために必要な副次的な任務」、ないしは文化革命の「成分」とであると限定的に評価される。⁽³³⁾

革命以後、1930年代にかけてのソビエトの文化活動の限界が明らかにされることにもなる。実際に、1919年の共産党第8回大会では、党綱領を採択し、人間活動の「全面的に発達した共産主義社会の構成員」が生み出されることが期待されていた。⁽³⁴⁾ そのことから考えると、社会主義的な人間に関する議論が、1930年以降、大いに欠如していたことが指摘できるのではないか。

2. エスペラント

(1) エスペラント語の国際的な性格

言語の上で民族の平等を維持するために、民族語を避けて人工語を採用しようとする発想する者も出てきた。少なくとも、同化という方法でなく、民族言語と民族言語をつなぐものとして新たな合理的な言語を作り出そうとする試みは、歴史上、数多く繰り広げられてきた。⁽³⁵⁾ 人工語のうち最大の勢力となるエスペラント語は、ロシア帝政下のポーランドにおいてユダヤ人ラザル・ザメンホフ（Lazaro Zamenhof: 1859-1917）が考案している。

このことから、エスペラント語とロシア革命とは社会的諸条件がつながっているとも言えよう。弱小民族や被抑圧者の解放という点のみならず、人工語にみられる合理的な組織化という手法は、社会主義の計画的生産と思想が一致していた。エスペラント運動研究者のフォスターが指摘するように、「世界の労働者を統合するという国際主義者の理念は、エスペラントを介して効果的に育成される」ことと、社会主義は社会を科学的に計画するという理念と関連してきたととらえて、「エスペラントはそのような科学的精神に合致する」というわけである。⁽³⁶⁾

ザメンホフは、ビャリストク (Bjalistoko) という町に生まれている。そこではロシア人、ポーランド人、ドイツ人、ユダヤ人が入り交じって住み、その仲は互いによくなかった。一つの町に理解の出来ない言語グループが共存するというのは、互いに疑心暗鬼を生み、ユダヤ人に対するロシア人の大量虐殺 (ポグロム) が起きることもしばしばあった。異なる言語を使用する人々をつないで共通の理解をもたらす新たな言語、それがザメンホフの追及したものであった。民族独立という道は、たいてい分裂と衝突をもたらす。そうではなく、大民族への同化という道でもなく、新たな統一という第三の道に進んだザメンホフの選択は、多民族が共存する社会を模索している今日の世界でさらに輝きが増しているといわなくてはならないだろう。⁽³⁸⁾

エスペラント語に関する最初の印刷物は1887年に当局より許可があり、『国際語』 (lingwe uniuersala) という書物が出版された。しかし、エスペラント語の出版物は、その後、その言語の国際性ゆえにロシア官憲の厳しい検閲の目にさらされることになる。

エスペラント語は、政治・社会体制を根本的に急激に変化させるといいうわゆる革命家たちよりは、革命によらず人間が教養を付け、道徳的に再生することによって社会を変革しようとする改革派の人々に受け止められた。その担い手は新興の労働者たちであり、普及運動は国境を越えて広がった。1905年、フランスのプローニュ・シュール・メール (Boulogne-sur-Mer) で最初の国際会議 (boulogne World congress) が開かれ、「エスペラント運動」 (esperantismo) は「全世界に中立語の使用を広める努力」であるという宣言 (Deklaracio de Boulogne; Declaration of Boulogne) を出した。1908年には「世界エスペラント協会」 (UEA: Universala Esperanto-Asocio; Universal Esperanto Association) が創立されるに至る。創立者であるヘクトル・ホドラーによれば、エスペラント運動は、言語習得と相互理解のための活動ではなく、「社会的、建設的、進歩的な運動」、つまり「民族を超えるもの」を作り出す運動である。すなわち、民族性、民族語、人種を無視した国際主義にたどり着こうとするのである。

労働者のエスペラント・サークルは、1903年にストックホルムで形成されたものが最初のもので記録されている。その後、1910年までにイギリス、フランス、ドイツ、ハンガリー、オランダに広がり、引き続いてチェコスロヴァキア、中国、日本で労働者のエスペラント・サークルが結成されている。とりわけフランスでは、エスペラント語が社会主義者の間で普及した。社会主義者のエスペラント運動家は、1906年ジュネーブで世界大会を開催し、世界的な組織を形成するまでの勢力となった。この動きに対応すべく、1911年には、「世界エスペラント協会」 (UEA) 内に労働者部が創設されている。

フランスの社会主義者ジャン・ジョレスは、共通語という意味でエスペラント語を「民主主義のラテン語」と呼んだが、他方で各国の官憲からは危険な左翼的運動と見なされる

ことにもなった。だが、エスペラント運動は、大まかには国際主義を掲げて軍国主義との闘争、個々の運動団体では資本主義そのものに反対するものや、飲酒、およびあらゆる教条や偏見などとも闘ったのである。それでも、第一次世界大戦をくい止めることはできなかった。その理由は、「民族主義教育を除去できなかった」からであるという指摘もある。⁽³⁹⁾

第一次世界大戦後には、エスペラント運動はさらに進展し、「世界エスペラント協会」(UEA)は、新しく結成された国際組織である国際連盟に対して努力を集中した。1920年12月には11カ国(ベルギー、ブラジル、チリ、中国、チェコスロバキア、ハイチ、インド、イタリア、コロンビア、ペルシャ、南アフリカ)が国際連盟に対して決議案を提起して、子どもたちが「父母の言語ならびに国際的コミュニケーションのやさしい手段」という少なくとも二つの言語を取得できることを希望すると表明した。列強から外れた小国は、エスペラントに国家的な利害を超えた国際的コミュニケーションを期待していたことがうかがえる。逆に考えれば、英語、フランス語、ドイツ語が、この時点で大言語として国際的に意識されていたということになる。

この決議案は、フランス代表ガブリエル・アノトー(Gabriel Hanotaux)によって激しい反対を受け、総会での審議は延期されてしまった。2年後にあたる1921年9月の第2回総会でも国際連盟に対しても同じ提案が行われた。時の国際連盟事務局次長は新渡戸稲造であり、彼はエスペラントを好意的にみていた。「富かつ教養のある人たちが文学作品や科学論文を原語で読むことができるのに対し、貧しくて身分の低い人たちがエスペラントをお互いの意見を交換する共通語にしている」⁽⁴⁰⁾という認識を、彼は表明している。エスペラントにたよれば弱者の側に国際民主主義が広められるのではないかと、新渡戸は期待したようである。国際連盟事務総長は、1922年1月に、国際連盟加盟各国に対して、国内の学校におけるエスペラント語の教育状況に関する報告を求めている。

1922年6月28日、国際連盟事務局は、『国際補助語としてのエスペラント』という報告書を作成した。その中では、国際連盟がエスペラントを世界精神の統一、国際的連帯心の育成という観点から評価している。

当時、エスペラント語に対する批判は、大きく分けて三点あったと言われる。第一に、エスペラント語は言語学的に不十分であるというものである。第二に、文学など民族言語の伝統を欠くので、機能水準が低いというもの、第三に、貧乏人と共産主義者の言語で、その国際主義は民族利害を損なうというものである。国際理解と国際平和のためには、先進諸国の民族言語を使えない「非知識人」にも国際言語が必要であるという論点は、説得力があった。だが、各国の指導者の媒介と翻訳によって各国の民衆はコミュニケーションが可能であると、反論がなされていた。この三点目は、エスペラントなどの国際主義はユダヤ人と結びつけてとらえられ、反国民的なものと判断されるに至る。⁽⁴¹⁾

(2) ロシアにおけるエスペラント語

実際に、エスペラント語は、国境や民族を越えて労働者の直接的な交流を盛んにし、社会主義者の間に支持を広げつつあった。多民族国家のロシアにあっては、このことは目に見える形で起きてきた。伝統ある民族語を習得することに比べれば、エスペラントの習得は比較的容易であり、その上、学校に通って外国語を習得するという経済力のない労働者には、サークル学習の程度で習得できるという、うってつけの言語であった。こうして身

につけた、エスペラントの助けを借りて労働者たちは社会主義のあるべき姿まで議論していたのである。

エスペラント活動家の多くは、ロシア革命を歓迎した。社会主義の計画化された社会は、計画的に考案された人工言語にとっては都合よいであろうと考えたからである。逆に、労働者の国際的な統一は言語の助けによって可能であると考えて、率先して国際労働運動を担う活動を展開させた。

1919年のこと、ロシアにおいて革命政権の教育人民委員部内に特別委員会が設けられ、国際補助語を教育する可能性を研究することになった。委員会の審議には、マキシム・ゴークキーも参加した。様々な国際語案を検討した後、特別委員会は、エスペラント語を最良のものを選び、ロシアの学校で必須教科として教えることを勧告することになる。⁽⁴¹⁾ 教育人民委員部はエスペラント語の普及を計画し、教育、教員養成、出版に着手している。⁽⁴²⁾ エスペラント語は、労働者階級が通訳の助けなしで諸外国の労働者、たとえばイギリス、フランス、ドイツ、中国などの労働者と交流できることを可能にすると期待されたのである。1919年のこの年、コミンテルン（Comintern: 第三インターナショナル）が創設されている。この時点では、ソビエト社会主義の利益とも、コミンテルンの理念とも、エスペラントの国際性は一致するものと見なされた。

ところが学校教科へのエスペラント語の導入は合意を得られず、教育人民委員ルナチャールスキーは、エスペラント語を選択科目として学習するという方針を明らかにした。

1921年8月、プラハでは、エスペラント運動を階級闘争と結びつけることを目的にして「全世界脱民族性協会」(SAT: Sennacieca Asocio Tutmonda) が創設される。集まったのは、15カ国、79人の代表者である。大会の決議では、エスペラント語を階級闘争に使用することを強調し、「世界エスペラント協会」(UEA) を政治的中立であると批判した。労働者たちが、エスペラント語のなかに、被抑圧者の解放と国際的な運動の連帯の力を感じ取っていたことは疑いない。

「全世界脱民族性協会」(SAT) 創立の中心人物は、ランティ (Lanti)、本名をウジェーヌ・アダム (1879 ~ 1947) と呼ぶフランス人であった。協会の発案は1920年11月にランティが行ったもので、協会の名称もランティの示唆による。ランティの政治姿勢を反映して、協会は民族別の運動を否定して、社会民主主義者にも共産主義者にも無政府主義者 (anarkist) にも運動の場を解放した。ランティは、同じエスペラント語を話す「エスペラント人」(Esperant people) が新しい社会を作るという理想を持ち、そのためには「無国籍人」(sennacieca popolo) を育成することが必要だと考えていた。「労働者には祖国は無い」あるいは「万国の労働者よ団結せよ」というスローガンと同じ思想が脈打っており、その意味ではランティはマルクスとレーニンの思想の正当な継承者であったというべきであろう。

「全世界脱民族性協会」(SAT) の創設を決めた8月のプラハ会議はこの年4月から準備されていたが、その途中の6月には、ランティはロシアのエスペラント運動家の組織問題に何らかの回答を迫られていた。「全世界脱民族性協会」(SAT) は、コミンテルンだけに従属すべきであるというロシアの活動家の主張があったからである。ランティは答えた、「協会は政治組織であってはならない」と。つまり「全世界脱民族性協会」(SAT) は、コミンテルンに従属しないと答えたのである。その後公然化する紛争の原因は、このよう

に最初から埋め込まれていた。

労働運動も、西欧においては、様々な形で展開され、社会主義も多様なものとして理解されていた。ところが、コミンテルンは、ソビエト型の社会主義を国際的にもふさわしいものと見なしていた。「全世界脱民族性協会」(SAT)は、設立当初からの多様性を維持しようとしたのであるが、協会の活動にも無理があった。翌1922年の第2回大会にて、会員が中立もしくは「ブルジョワ」的なエスペラント組織の会員をかねることを禁止したからである。伝統的な「世界エスペラント協会」(UEA)との決裂を意図していたとしても、いわゆるプロレタリアートのいないような地域では活動の足がかりさえ見いだせないことになった。

新生ソビエトのエスペラント活動家たちは、「全世界脱民族性協会」(SAT)に活動の場を見つけ、彼らは協会の活動の質を高めた。エルネスト・ドレーゼン⁽⁴³⁾を中心にして、1921年には「ソビエト・エスペラント活動家同盟」(SEU: Sovetlanda Esperantista Uniugo; Soviet Esperanto Union)が結成されている。同盟は、革命直後の失敗を反省して、学校教育にエスペラント語を持ち込む運動よりは、外国の労働者との相互理解に活動の目的を絞った。革命政権の側からは、ソビエトの革命思想を外国に普及するという点で積極的に評価されたようである。

組織問題は、エスペラント外部組織との間でも起きた。コミンテルンは、1921年7月の第3回大会にて「第三インターナショナルにおける国際語採用問題検討委員会」の設置を決定している。この時、労働者運動における国際交流の言語をどのようにするかが課題になっていたのである。だが、この特別委員会の委員長ならびに書記は、国際語としてエスペラントよりは、別の人工言語であるイド(Ido)を推奨していた。委員会は、エスペラントの導入には好意的ではなかったのである。ちなみに、イドの支持者たちは1921年に最初の会合をウィーンで開き、この時、組織の内部には共産主義者部会も結成されていた。イドの活動家たちは、とりわけコミンテルン(第三インターナショナル)で活動を展開していた。

革命政権の方針は一貫せず、1921年12月21日付けの政府機関紙『イズベスチヤ』で、各都市の政治教育部に開設されているエスペラント部を廃止する決定を掲載した。⁽⁴⁴⁾

そして、コミンテルンの「国際語採用問題検討委員会」は、1922年3月に、さして成果も上げることなく解散してしまった。委員会の結論は、国際語としてエスペラントとイドがふさわしく、中でもイドの方がふさわしいというものであった。このような力関係の中で、1923年5月には、コミンテルンはいかなる言語にも特権を与えないとする立場を表明する。結局のところ、コミンテルンはエスペラント語には特別の評価を与えなかったということである。コミンテルン議長のジノヴィエフは、「言語の差異をなくすことはできない」、それは「民族問題をなくすことが不可能である」のと同じだと表明して、エスペラント語による国際的交流を否定した。ここには、国際労働運動をめぐるポリシェビキとの対立もまた反映されているであろう。

民族性を意識してその確立に努めるか、逆に民族性は死滅すべきものとして無視するのか。革命政権は、初期のうちからその選択を迫られていた。そして、革命政権の政策は、分裂しない範囲で民族性を活用する路線で進められることになった。

国際的には、「全世界脱民族性協会」(SAT)の活動は拡大し、その会員は1921年の390

人から1922年に1064名、1926年に2960名、1927年に5216名、1929年に6329名という具合で増加した。同協会発行の『脱民族人』(Sennaciulo)は、1924年10月から週刊誌となっている。『脱民族人』には、世界の労働運動に関するニュースが毎回掲載され、まさに世界に開かれた窓であり、労働者たちに国境を越えた連帯を感じさせる手段となっていた。

エスペラント語には、国際通信活動などを可能にして、国際的な相互理解を図るという点で国際教育としての期待が高まった。1926年には、レニングラードにおいて、「全世界脱民族性協会」(SAT)の第6回大会が開催され、教育人民委員のルナチャルスキーが名誉議長の名を引いている。大会に先駆け、1925年には、ソビエト政府はエスペラント大会を記念して、エスペラント関係では世界初となる切手を二種類も発行している。このような点からみても、当時のソビエトでは多数の労働者の個々の表現が国際的にも容認されていたということであり言語表現という観点からきわめて重要なことであった。エスペラント語は、ソビエトの国際的発言力を増すものとして促進されていた。だが、そのことは、イデオロギーの上から随分多様なグループを含み込んだ協会の活動を公認したわけであり、当時のソビエト社会の国際的な雰囲気は推測できるであろう。

1926年から1931年までの5年間は、ソビエトにおけるエスペラント運動の最盛期で、実に多くの出版物が発行された。エスペラント語は、ソ連邦内の52の民族、11873名の会員で支えられていると報告されている。しかし、この間にも衰退の兆しが始まり、そして1930年代にソビエトのエスペラント運動は急速に崩壊することになる。

(3) エスペラント運動の孤立と崩壊

ことは、ソビエトを批判する人々を組織にとどめるか否かにかかっていた。「全世界脱民族性協会」(SAT)の指導者であるランティは、アナキストからの批判を認めなかったため、アナキストたちは1925年に協会を去っている。だが、ランティ自身もソビエトの現状には疑問を持っていたので、ソ連邦の政策を批判する文章には寛容であった。1928年、スウェーデンのイエーテボリ(Goteborg)で行われた「全世界脱民族性協会」(SAT)第8回大会の場で、ドレーゼンは、公然とランティの文章を反ソ的であると批判し始めた。ソビエトのエスペラント運動家は協会を脱退するとさえ言い始めた。この年、スターリンは、コミンテルン第6回大会にて、社会民主主義者を「ブルジョワ」的社会主義者と呼んで彼らに攻撃の矛先を向け、ポリシェヴィキ以外を反対派とみなす路線を徹底した。すでにこの年、ソ連邦は一国社会主義に道を踏み出していたのである。だが、この時点でもまだ、国際労働運動の分裂につながるとして、エスペラント運動の分野では批判の手は厳しくなかった。

1928年の末に、ランティは組織内の対立を考慮して、協会の活動の性格を「脱民族主義」と明確化した。⁽⁴⁵⁾ところが、これが紛争の火種となる。翌年の1929年にドイツで行われた「全世界脱民族性協会」(SAT)第9回大会では、ソビエトの代表が協会の方針を激しく攻撃した。協会の指導部は日和見主義的、非マルクス主義的、反ソ的と非難し、社会ファシズムという言葉さえ投げかけるようになった。ちょうど、コミンテルンが、思想的に近親関係にある社会民主主義者を非難するのと同じ論理であった。だが、このような変化は、政治的なもの、とりわけ一国社会主義の理念が大きく影響していることは、容易に推測できるだろう。

最終的な決裂は、1930年にロンドンで開催された第10回大会で訪れた。もともと、この大会の開催地としてモスクワが検討されていたのに、社会民主主義者の入国を恐れるドレーゼンが拒否したのである。レニングラード大会を迎えた1926年当時のソビエトの雰囲気と比較すれば、5年もたたないうちにいかに政治の世界が変化したかがわかる。「全世界脱民族性協会」(SAT)のロンドン大会には、45人の代表者が登録されているが、ソビエトからは誰も出席しなかった。大会後、「ソビエト・エスペラント活動家同盟」(SEU)は別の機関誌を発行して独自の活動を始め、1931年には機関誌『脱民族人』との関係も絶った。

ついに1930年に、「ソビエト・エスペラント活動家同盟」(SEU)は「全世界脱民族性協会」(SAT)および「各国労働者エスペラント協会」(LEA)から脱退してしまうことになる。1932年の10月、「全世界脱民族性協会」(SAT)反対派は、「プロレタリア・エスペラント・インターナショナル」(IPE)を結成した。これには、ドイツ、ブルガリア、日本、アメリカ合衆国の組織がただちに加わった。さらに後、中国、イギリス、フランス、チェコ・スロヴァキア、オランダなどに組織は広がっていき、世界の18カ国、13000名の会員を擁していると公表されるまでになる。機関誌には、日本や中国の文字をラテン文字化する案が提案されるなど、知識を大衆に普及しようとする思想が掲載されていた。エスペラント語は、ソビエトの外では、亡命したり義勇軍に加わった労働者が手取り早く交流する言語手段としてある程度評価されたようである。しかし、ソビエト内では別の動きが展開していた。

ランティは、批判を受けて、協会の活動方針を明確化する必要に迫られた。彼は、これまで大まかに理解されていた「脱民族主義」(sennaciismo)を、組織問題を念頭に置きながらより明確化した。これが、『脱民族人宣言』(1931年)である。⁽⁴⁵⁾彼は、社会主義者が政権奪取を運動の第一目標とすることを批判したのである。これは、ソビエト方式の革命を推進していたコミンテルンとの違いを再確認することになった。また、ランティは、あらゆる民族的特質、たとえば民族語、民族文化、民族的な慣習や伝統にも反対した。民族語は消滅するという展望さえ示している。脱民族主義は、合理性、反神秘性にに基づき、理性と進歩を追及すべきであり、民族的な諸特質は、脱民族主義にとっては障害になるとランティは考えたのである。ところが、この方針は、マルクス主義本来の思想には一致していたが、一国社会主義に踏み出したソビエトとはまたまた対立する要素となった。

ソビエト国内の立場でいえば、「ソビエト・エスペラント活動家同盟」(SEU)は、まだ共産党からの全面的な攻撃を受けていたわけではない。1934年には労働組合中央評議会とウクライナ・コムソモール(共産主義青年同盟)の強力な支持を得ていたようである。1934年末の会員数は、8580名を数えていた。それでも、一部の地域を残して、エスペラントの普及はストップした。

1935年には、コミンテルンの方針転換に基づいて、これまで攻撃し続けてきた「全世界脱民族性協会」(SAT)に対して、労働者のエスペラント組織から統一の呼びかけが提起されたが、両者が和解するまでには至らなかった。

1937年始めには、「ソビエト・エスペラント活動家同盟」(SEU)は、「ソビエト憲法」とそれにまつわるスターリンの論文を翻訳して出版している。

1937年には、「ソビエト・エスペラント活動家同盟」(SEU)は、非合法化され、ソ連邦

国内のエスペラント運動は消滅したと報じられた。1937年末には、ソビエトから国外に向けて放送されていたエスペラント語のラジオ放送が中止されている。主だったエスペラント活動家たちの逮捕もまた、1937年に集中している。その変化の始まりは、1935年のペラルーシの運動家スネジコが逮捕されたときであるとしても、変化はあまりにも急激であった。ドレーゼンも逮捕されて、獄死した。

その理由は、エスペラント運動家が、国外にソビエトを批判する手紙を書いたからだというものであった。エスペラント運動家にとっては、言語の能力、国際交流の能力と交流で培った人脈が、対立の時代には仇になったのである。

(注)

(1) 。「教育人民委員部」()の長。
教育人民委員部は、革命直後に形成され、1947年には「教育省」と改名される。

(2) , 1958, .17, 233.
中央委員会の審議は、1917年10月24日から25日にかけて行われているので、レーニンとの会談は10月26日のことのような。(米川哲夫「国内戦期における文盲撲滅運動」江口朴郎編『ロシア革命の研究』中央公論社、1968年、833ページ。)

(3) 廣岡正久『ソヴィエト政治と宗教』未来社、1988年。

(4) ルナチャルスキー「教育とは何か」(1918年)『労働教育論』明治図書、1960年、59-60ページ。

(5) ルナチャルスキー「ソビエト・ロシアにおける校外教育の任務」(1919年) : , 1976, .372.

(6) レーニン「プロレタリア文化啓蒙団体代表者会議幹部会への手紙」(1918年)『レーニン全集』28巻、91ページ。

(7) レーニン「校外教育第1回全ロシア大会：祝辞」(1919年)『レーニン全集』29巻、331-335ページ。

(8) レーニン「校外教育第1回全ロシア大会：自由と平等のスローガンによる人民の欺瞞についての演説」(1919年)『レーニン全集』29巻、373-374ページ。

(9) 1918年9月30日、全ロシア中央執行委員会にて承認。従来、『単一労働学校令』と訳されてきた。

(10) レーニン「総合技術教育について：ナジェジュダ・コンスタンチノヴナのテーゼについてのメモ」『レーニン全集』第36巻、490-492ページ。 , .42, .228-230.

(11) スターリンとブハーリンなど右派との闘争のなかでルナチャルスキーが排除されていく様子は、Timothy E.O'Connor, *The Politics Soviet Culture: Anatolii V.Lunacharskii; Revolutionary Romanticism and the Soviet Intelligentsia*, UMI Research Press, 1983.

(12) : , 1917-1973. , 1974, .7-8.

(13) 『ロシア諸民族の権利宣言』1917年11月2日採択、 , 1957, .39.

- (14) 人民委員部の最初の公式報告 (1917年10月 - 1920年)。
- (15)7, .677.
- (16) 1919年12月26日採択、12月30日公表。 :
 , 1917-1973. , 1974, .377.
- 「非識字者一掃」()とは、従来は「文盲撲滅」と訳されてきた。
- (17) Sheila Fitzpatrick, *The Cultural Front: Power and Culture in Revolutionary Russia*, Cornell University Press, 1992. 彼女は、以下の論文から示唆を受けたことを認めている。 Ronald Hideo Hayashida, "The Third Front: The Politics of Soviet Mass Education, 1917-1918" (Ph.D.diss, 1973) .
- (18) Gerhard Simon (translated by Karen Forster & Oswald Forster) , *Nationalism and Policy toward the Nationalities in the Soviet Union: From Totalitarian Dictatorship to Post-Stalinist Society*. US: Westview, 1991, p.48.
- (19) 国際機関であるユネスコが識字運動を提唱するのは第二次世界大戦後のことである。この時、ソビエトの経験が見直され、機関誌にも詳細に紹介された。 Abolition of adult illiteracy in the USSR, 1917-1940. *Fundamental and adult education*, UNESCO, Vol.11 (3) , 1959, pp.131-192.
- (20) チングス・アイトマートフは、キルギスにおけるそのいきさつを『最初の教師』(1963年)に生き生きと描いている。アイトマートフ『母なる大地・最初の教師』第三文明社、1990年。
- (21) 小野左知子「農村読書室の仕事」ロシア史研究会編『ロシア農村の革命』木鐸社、1993年、199ページ。
- (22) :
 () . 1925.9, 1960, .201-202.
- (23) *Fundamental and adult education*, UNESCO, Vol.11 (3) , 1959, p.138.
- (24) 実現は困難を伴い、第一の目標は1940年に実現したが、第二の目標は1958年に生徒のやっと80%に達しただけであった。 J.Pennar; I.I.Bakalo; G.Z.F.Bereday, *Modernization and Diversity in Soviet Education: With special reference to nationality groups*. N.Y.; Praeger, 1971. p.288.
- (25) 野田岳人「ソヴェト初期における言語政策の形成」拓殖大学『海外事情』1996年2月号。
- (26) , 1930. ただし、ルナチャールスキーの筆によるものではなく、記者がまとめた講演記録である。出典は、 5 6
 6 7 , 1929. とされる。しかし、二つの文章には食い違いがあるようだ。
- (27) , 1930.
- (28) 田中克彦『言語の思想：国家と民族のことば』NHKブックス、1975年、

179ページ。

- (29)3, , 1959, .462-474.
- (30)3, , 1959, .473.
- (31) Natalia Voskresenskaya; Russian Education for International Understanding, Co-Operation to Promote Human Rights and Fundamental Freedoms. In Douglas Ray (ed.), *Education for Human Rights: An International Perspective*. UNESCO, 1997.
- (32) 和田あき子「ロシア革命における人間変革の思想」江口朴郎編『ロシア革命の研究』中央公論社、1968年、788-824ページ。
- (33) 米川哲夫「国内戦期における文盲撲滅運動」江口朴郎編『ロシア革命の研究』中央公論社、1968年、827ページ。
- (34) , .2, , 1962, .244.
- (35) 人工語は、第一次世界大戦を前にして、次のように年に二つのテンポで考案されていた。これをみても、当時、いかに民族問題なかでも言語問題が注目を集めていたかがわかる。Cosmoglossa (1858), Universalglot (1868), Volapuk (1879), Weltsprache (1883), Balta (1887), Esperanto (1887), Spokil (1887), Spelin (1888), Anglo-franca (1889), Mundolingue (1890), Dil (1893), Veltpar1 (1896), Dilpok (1898), Lingua komum (1900), Reformlatein (1902), Universal Latein (1902), Idiom neutral (1902), Latino sine nexione (1903), Interlingua (1903), Perio (1904), Lingua internacional (1905), Mondlingvo (1906), Ulla (1906), Ido (1907), Lingwo incernaciona (1907), Apolema (1907), Lingua european (1907), Mez-voio (1908), Romanizat (1908), Dutalingue (1908), Romanal (1909), Adjuvilo (1910), Nuv-esperanto (1910), Reform- esperanto (1910), Semi-Latin (1910), Perfect (1910), Latin-esperanto (1911), Latin-ido (1911), Lingw adelfenzal (1911), Simplo (1911), Novi Latine (1911), Molog (1911), Reform neutral (1912), Europeo (1914)。(Louis-Jean Calvet, translated by Michel Petheram, *Language Wars and Linguistic Politics*. Oxford University Press, 1998. pp.195-196.)
- (37) Peter G.Forster, *The Esperanto Movement*. Hague; Mouton Publishers, 1982, p.187.
- (38) なだいなだ、小林司『20世紀とは何だったのか：マルクス・フロイト・ザメンホフ』東京：朝日新聞社、1992年。共産主義、精神分析、エスペラントの軌跡を追いながら、人間社会の過去、現在、未来について考える。ユダヤ人が、1世紀前に、今日の世界的な問題に直面して、その解決を探っていたことを指摘している。
- (39) Peter G.Forster, *The Esperanto Movement*. Hague; Mouton Publishers, 1982, p.192.
- (40) リンス『危険な言語』岩波書店、1975年、19ページ。Ulrich Lins, *La Danĝera Lingvo: Studo pri la persekutoj kontraŭ Esperanto*. Moskva; Progreso, 1990.
- (41) その典型が、ヒトラー『わが闘争』(1925年)であろう。
- (41) リンス『危険な言語』岩波書店、1975年、130-131ページ。
- (42) , No.11/12, 1919, pp.102-103.

- (43) ラトヴィア人。ツァーリの軍隊の青年将校、赤軍の高級将校(1918-1921)、共産党で文化問題を担当したカリーニンの秘書(1921-24)、通信研究所所長(1926-30)。「ソビエト・エスペラント活動家同盟」(SEU)の総裁。対外文化連絡協会(BOKC)の副会長、モスクワ大学教授も兼任。
- (44) 「政治教育総局()は、エスペラントの教育について各地から寄せられている質問について回答する。エスペラント語を政府が絶大な注意を払うに値する国際語と考えるには、現在のところ時期尚早である。エスペラントのサークルは、私的組織である。各都市の政治教育管理局に現在設けられているエスペラント部は廃止されなくてはならない。」 , .21, 1921.
- (45) これがE.Lanti, *Manifesto de la sennaciistoj, kaj dokumentoj pri sennaciismo*, 1931.である。